Osaka Shoin Women's University Repository

「落ちず」「去らず」の成句について

北村英子

万葉語彙の中でここでは「落ちず」と「去らず」という成句を取り上げて考察したい。

「落ちず」も「去らず」も共に打消の助動詞「ず」を伴って成句をなし、「一夜もおちず」「一日もおちず」・「夕さらず」「朝さらず」のように使われている。そして、「いつも」とか「～ごとに」とか「どの～も」と訳され、いずれも連続性を示す場合に用いられているが、当時の人々は何かその語を意識して使い分けをしていたにちがいないと考え検討することにした。

後掲した資料は「落ちず」と「去らず」の成句の全用例を時間語と空間語に分けてみた。中には時間語として扱うべきか空間語として扱うべきか問題のものもあるが、一応便宜上このように分けてみたまでにすぎない。

後掲の全用例を紙幅の都合上、一首ずつ説明する余裕がないので、この資料を通してわかった事と問題の箇所について述べてみたい。

先ず「落ちず」の時間語から見ていくことにする。

(3)今更　将寐哉我背子　荒田夜之　全夜毛不落　夢所見欲　(三一二〇)

「落ちず」の上接語「全夜」の訓みに問題がある。澤瀉久孝著『萬葉集注釋』(中央公論社)によると、

舊訓マタヨとあるを、童蒙抄にヒトヨとし、古義に「全ノ字をかけるは、全一夜の義にて、俗に、丸一夜といふ意を得て書るなり」と云った。――(略)――、ここも古義にいふやうにヒトヨと訓んでよいと思ふ。(巻第十二・二二三頁)

とあり、澤瀉久孝著『萬葉集注釋』(中央公論社)、高木市之助・五味智英・大野晋校注『萬葉集三』(岩波書店「日本古典文学大系」)、鶴久・森山隆編『萬葉集』(桜楓社)等では、『萬葉集古義』に従って、「ひとよ」と訓んでいる。わたくしも資料(2)番―(二八四二)歌、

(2)我心　等望使念　新夜　一夜不落　夢見与　(二八四二)

Osaka Shoin Women's University Repository

と、類歌があり三句目以下（三一二〇）歌も（二八四二）歌も同じ句であると推察した時、「全夜」のままで「ヒトヨ」と訓むべきではなかろうかと思う。そのように訓んでこそ本論で問題にしている語彙「落ちず」の意味が生きてくる。そして、「一夜も欠かさずいつも」と訳すことが出来るのである。

次に(4)番歌

(4)今更　戀友君二　相目八毛　眠夜乎不落　夢所見欲　（三一八三）

ここで「眠夜乎不レ落」とある「乎」の助詞について考察してみたい。「眠夜乎」と諸本異同なく「乎」の文字がはっきり記されているが、「落ちず」の全用例を通観すると、「落ちず」の上接語はほとんど「も」という助詞がある。「も」という助詞が入っていないもの、例えば(1)番―（六）歌「寐夜不レ落」・(14)番―（五一四）歌「針目不レ落」等、五音句のところ一字余りになっているため「も」という助詞が入れたいところ入らなかったのではないかと考えられる。

このように考えてくると、この(4)番―（三一八三）歌の「眠夜乎不レ落」の「を」も「も」という助詞ではなかったかと考えられる。強いていえば、この「を」は他動詞を呼ぶ「を」ではなく、他の「落ちず」に上接する「も」と同じ性格を有する詠嘆の助詞であるから、「乎」でも何らさしつかえがないかもしれないが次のように考える事が出来る。推測のしすぎかもしれないが考え方の一つとして示しておきたい。

「も」が「を」に単に間違ったのではないとすれば同じ漢字で「も」とも「を」とも訓める文字を「も」と訓まずに「を」と訓んでしまった可能性が考えられる。一つの漢字を「も」とも「を」とも訓める漢字の例を示すと、

○甚毛　夜深勿行　道邊之　湯小竹之於尓　霜降夜焉　（二三三六）

○柜楮越尓　麦咋駒乃　雖詈　猶戀久　思不勝焉　（三〇九六）

このように「焉」の漢字を「を」とも「も」とも訓んだ例がある。しかし、この文字は今示したように句末にしかくる例がないので、この証明には弱いかもしれない。が、斐学海著『古書虚字集釈』に

「焉」猶「乎」也（注1）（一〇一頁）

とある。これから考えると「乎」の文字のままで「を」と訓まず「も」と訓んだ可能性も考えられる。要するに、この(4)番―（三一八三）歌「眠夜乎不レ落」の「を」の部分は「落ちず」の全用例からして、すべて「も」という助詞がきていること。それから考えると「も」を「を」と単に誤写したのでないとすれば、先に示したような考え方が出来る。

次に(5)番歌

(5)三吉野之　御金高尓　間無序　雨者落云　不時曽　雪者落云
其雨　無間如　彼雪　不時如　間不落　吾者曽戀　妹之正香尓　（三一九三）

Osaka Shoin Women's University Repository

「落ちず」の上接語「間も」の語彙について、土屋文明著『万葉集私注七』（筑摩書房）には「ひまも」と訓んでいる。「落ちず」の用例、(11)番―（二五）歌・(12)番―（二六）歌を見ると、

(11)三吉野之　耳我嶺尓　時無曽　雪者落家留　間無曽　雨者零計
類　其雪乃　時無如　其雨乃　間無如　隈毛不落　念乍叙来
其山道乎　（二五）

(12)三芳野之　耳我山尓　時自久曽　雪者落等言　無間曽　雨者落
等言　其雪　不時如　其雨　無間如　隈毛不堕　思乍叙来
其山道乎　（二六）

この二首は(5)番―（三二九三）歌の類歌である。この(11)番―（二五）歌・(12)番―（二六）歌を見ると、いずれも「くまもおちず」と「くまも」となっており「まもおちず」「ひまもおちず」という用例は見当たらない。「落ちず」の時間語全体を通観すると、「落ちず」の上接語は、いずれも、「ぬるよ」・「ひとよも」・「ひとひも」という限定された時間語、プラス「も」に接続している。

このように見てくると、この(5)番―（三二九三）歌は、(11)番―（二五）歌・(12)番―（二六）歌の後に作られ「くまもおちず」の伝承の間の誤りではないかと考えられる。そのように考えて空間語として処理すべき用例ではないかと思われるがいかがであろうか。一考を示しておきたい。

さて、「落ちず」の時間語全体からわかることは、先述した(5)番―（三二九三）歌を除いて、すべて、「ぬるよ」・「ひとよ」また、「ひとよ」の対義語「ひとひ」という限定された時間的広がりのある時間語、プラス「も」という助詞に接続し、「去らず」の時間語のように「あさ」とか「ゆふ」という時間の流れの中での一点を示す時間語に接続する用例はない。したがって、「あさおちず」・「ゆふおちず」というような用法は見当たらない。また逆に、「ひとよもさらず」・「ひとひもさらず」というような用法も見当たらない。

そして、この「ぬるよおちず」・「ひとよもおちず」・「ひとひもおちず」の解釈は、「寝ると毎晩」・「一晩も欠かさずいつも」・「一日も欠かさずいつも」というように訳すことが出来る。

では、「落ちず」の空間語を検討してみると、「落ちず」の上接語は、「隈毛」・「八十阿」という場所語に、「針目」というのは縫う場所を示し、「淵瀬物」は淵や瀬という場所で、すべて場所語に接続していることになる。そして、「くまもおちず」は「道の曲がり角ごとに」と訳され、「やそくまおちず」は「たくさんの曲がり角ごとに」と訳され、「はりめおちず」は「縫い目ごとに」と訳され、「ふちせもおちず」は「どの淵瀬にも」と訳すことが出来る。

次に「去らず」の説明に移る。

先ず時間語の四番歌

(4)余呂豆余尓　伊麻志多麻比提　阿米能志多　麻乎志多麻波祢
美加度佐良受弖　（八七九）

この歌意として、各注釈書に次のように訳されている。

〝万年の後までも長寿をお保ちになって、天下の政治をお取り下

Osaka Shoin Women's University Repository

さい。朝廷を決してお去りにならずに〟と、「美加度佐良受弖」を「朝廷を決してお去りにならずに」と、「去る」本来の意味に解釈しており、一見例外のようにみえるが、よく考えてみると、この「美加度」を「朝廷」という場所の意味に解しないで、「天皇様」と解すると、「どの天皇様の御代でもずっと」と訳すことが出来、時間語で処理出来る。このように解すると決して例外的でなく、成句に適用した例になる。

しかし、後述するが、「去らず」の時間語の上接語を通観すると、この(4)番―（八七九）歌を除いて、すべて「あさ」またはその対義語「ゆふ」に接続し、「みかど」に接続する例はこの(4)番―（八七九）歌のみである。であるから、この(4)番―（八七九）歌を時間語として処理することに些か疑問は残るが、今回ここでは「去らず」の意義を重視し、あくまで成句に適用した例として時間語で処理しておきたい。

次に「去らず」の(7)番―（二〇二六）歌・(8)番―（二〇九八）歌の説明に移る。

(7)白雲　五百遍隠　雖遠　夜不去将見　妹當者　（二〇二六）

(8)奥山尓　住云男鹿之　初夜不去　妻問芽子乃　散久惜裳　（二〇九八）

この二首については、「去らず」の上接語「夜」「初夜」の訓みに問題がある。鶴久・森山隆編『萬葉集』（桜楓社）等には「夜」・「初夜」と「ゆふ」で統一している。この訓には決定的な証拠があるわけではないが、原田芳起著『平安時代文学語彙の研究』中に次のような御説がある。

「あさ」に対する語には「ゆふ」と「よひ」とがある。「よひ」は格助詞その他体言を受ける助詞に装定されることができるし、主格や修飾格に立つことができるが、語頭に置いて熟語を造るのには用いなかった。「よひやみ」などいう語は、万葉にはなかったと見てよいようである。

「あした」には「ゆふべ」があった。これは、夜の明ける時と、夜に入る頃とで、時が狭く限定される語である。現代語の「ゆう」はむしろこの「ゆふべ」の意味を受ける。

Aあさ―よひ（格となる、語頭に置いて熟語をなさぬ）

Bあさ―ゆふ（語頭に置いて熟語をなす、格とならぬ）

Cあした―ゆふべ

右のようにならべて見ると、「ゆふ」は「よひ」と補いあう。時の上では「よひ」と同じであって、「ゆふべ」より範囲が広く自由になると考えてよい。このことが「ゆふ」「よひ」ともに〈夕・暮・晩・夜〉と意義の範囲の広い漢字を共通に用いさせたと解釈することができる。

右の語彙組織に合わせて考えると、「朝離らず」に対する形は「ゆふさらず」であったと考えるのが、条理にかなうのではないか。「暮不去」「夕不離」「初夜不去」も統一してすべてそう訓むことができるはずである。かく処理することで、「初

Osaka Shoin Women's University Repository

夜」もまた「よひ」「ゆふ」の両方に通じて用いたと見られ、「三更」だけが片方だけの用例にとどまるが、他はすべて両方の訓をもつことになる。

「夜」を「ユフ」と付訓したい例はまだある。

ぬばたまの「夜去来者」巻向の川音高しもあらしかも疾き　〈二〇一〉

「」内は「ヨルサリクレバ」と訓んで来ているが、

玉かきる「夕去来者」〈四五〉〈一八一六〉

と統一して訓みたくなるがいかがであろう。この形の背後には当然「ゆふされば」がある。仮名書き例八、「夕」を用いた例一〇、「暮」を用いた例一七、計三五例を「ゆふされば」「ゆふさらば」など訓んでいる。（「ゆふさらば」はあやしい。「ゆふされば」に統一できる）。この中にあって「よるさりくれば」は異例である。「夜」をかならず「ヨル」「ヨ」と訓もうとするところに問題があるわけである。

「ゆふされば」「ゆふさりくれば」がある上に「よるさりくれば」を区別することはもともとありえないことだともいえる。「春されば」も冬がつきて春に移る始めの時点でとらえた表現であったのだから、「夕されば」も同様なわけで、「よひ」となることすなわち「ゆふされば」であったのである。（一三六～一三七頁）

とある。この御説に従って、(7)番―（二〇二六）歌・(8)番―（二〇九八）歌の「夜」「初夜」も「ゆふ」と訓んだものと考えたい。

さて、「去らず」の時間語の上接語を通観すると、(4)番―（八七九）歌を除いてすべて「あさ」またはその対義語「ゆふ」に接続していることになる。時間的な流れの中の一点を示しており、「あさごとに」「ゆふごとに」また、「どのあさもいつも」「どのゆふもいつも」と訳され、(4)番―（八七九）歌は「どの天皇様の御代にも」と訳すことが出来、反復性を示している。

「去らず」の空間語を受ける場合は二つに分けて考える必要がある。すなわち、一つは、(12)番―（三二五）歌の「川余藤不レ去」・(14)番―（二一六一）歌「石本不レ避」のように空間的にいくつも存在するものを受ける場合があり、この場合こそ本当の空間的存在というべきで、「あらゆる川淀ごとに」「あらゆる石のもとに」と訳すべきだと思う。『萬葉集三』（岩波書店「日本古典大系」）がこの「石本不レ避」を「石のもとでいつでも」と訳しているのは無理ではなかろうか。

空間語を受ける場合のもう一つは、(15)番―（二五〇一）歌・(17)番―（二九五七）歌の「床重不レ去」・「床邊不レ離」・(13)番―（八〇九）歌の「麻久良佐良受提」のように空間的には一つの物を受ける場合がある。この「とこのへ」にしても「まくら」にしても空間的には一つの物を受けている。したがって、「どの寝床でも」「どの枕でも」とは訳せない。いわば半ば時間的要素を備えており、「床に入るごとに」「枕して寝るごとに」と訳すべきであると思う。それを小島憲之・木下正俊・佐竹昭広校注・訳『萬葉集二』（小学館「日本古典文学全集」）のように「枕を離れず」とか、「床のあたりを離

Osaka Shoin Women's University Repository

資料

・テキストは「塙本万葉集」を使用した。
・索引は「万葉集総索引」正宗敦夫編・平凡社を使用した。

空間語

	お	ち	ず
(1)	六	山越乃 風乎時自見	寐夜不落 家在妹乎 懸而小竹櫃
(2)	二四一	我心 等望使念 新夜	一夜不落 夢見与
(3)	三二〇	今更 将寐我背子 荒田夜之	全夜毛不落 夢所見欲
(4)	三二三	今更 戀友君一 相目八毛	眠夜乎不落 夢所見欲
(5)	三二三	三吉野之 御金高尓 間無序 雨者落云 不時曽	雪者落云 其雨無間如 彼雪乃 不時如 間無不落
(6)	三四四	和佐毛故我 伊可尓於毛倍可 奴婆多未能 比登欲毛於知受	伊米尓之美由流
(7)	三六三	之賀能安麻能 一日毛於知受 也久之保能 可良佐孤悲乎母	安礼波須流香母
(8)	三七八	於毛比都追 奴礼婆可毛等奈 奴婆多麻能 比等欲毛意知受	伊米尓之見由流
(9)	三七六	牟可比為豆 一日毛於知受 見之可母 伊等波奴伊毛乎	都香和多流麻豆
(10)	三九七	相良乃波 妹毛吾毛 許己呂波於夜自 多貝敝礼登 伊夜奈都可之久	波思家夜之 登許波都 波奈尓
		阿之比奇能 夜麻古要奴由夜	安我於久豆麻 大王能 美許登加之古美
		別来之 曽乃日乃伎波美 荒礒能 登之由吉敝利	安麻射加流 比奈乎左米尓等
		宇治 相見弥婆 伊多母須敝久奈美 之伎多倍能	布麻泥尓 布佐礼登
		蘇泥可敝之 宿夜於知受 伊米尓波見礼登	都追
		宇都追尓之 多太尓安良祢婆 孤悲之家口……(略)……	都追尓之

	そ	ら	ず
(1)	三六六	今日可聞 明日香河乃	夕不離 川津鳴瀬之 清有良武
(2)	三三一	春日乎 春日山乃 高座之 御笠乃山尓	雲居奈須 心射左欲比
		雲居多奈引 容鳥能 間無敷鳴 雲居奈須	回不離
		其鳥乃 片恋耳一 書毛者毛 日之盈 夜者者毛 夜之盈	
		立而居而 念曽吾為流 不相兄故荷	
(3)	四三	角障経、 石村之道乎 朝不離	将帰人乃 念乍
		通一計萬口波 霍公鳥 鳴五月者 月者	蒲生
		貫交云へ 戀尓将為登 九月能 四貫礼能時者	黄葉乎 玉貫
		折捕頭跡 延葛乃……(略)……	
(4)	八七九	余呂豆奈尓 伊麻志多麻比提 阿米能志多 麻乎寸志多麻波祢	
		美加度佐良受弖	
(5)	一〇七四	鹿脊之山 樹立奈繁二 朝不去 寸鳴響為	隠之音
(6)	三四三	三空往く 月讃壮士と 夕不去 目庭には雖見 因縁毛無	
(7)	三〇三六	白雲 五百遍隠 雖遠 夜不去将見 妹	当者
(8)	三〇九八	奥山尓 住云鹿之 朝夜不去 妻間茅子乃	散久惜愛
(9)	三三一	喜不去 河鹿鳴成 三和河之 清瀬音乎	聞師吉毛
(10)	四〇三	阿佐比左之 曽我比尓見由流 可無奈我良 弥奈尓於久婆	
		之良久母能……(略)……弥祢太可美 多尓平布可美等	
		多都奇布佐礼婆 久毛為多奈毗吉 安佐良左良受弖	
		由布佐礼登 吉欲伎可敷知尓	
		於知多麁都 知和多利	
		於毛比須賀久奈美 久毛為奈須	
		由久美つ豆乃 須賀乎	
		於等母佐伎 己許呂毛毛比	
		佐伎礼登	
		……(略)……	
(11)	四〇六	可伎加蘇布 敷多我美夜麻尓	
		毛等母延毛 於夜目得伎波尓	
		安佐良受 安比豆許登と騰比 由布佐礼婆 波之弁佐備豆	
		伊美豆河波……(略)……	

	を	ま	ず
(1)	三二三	山越乃 風乎時自見	寐夜不落 家在妹乎 懸而小竹櫃
(2)	二六四一	我心 等望使念 新夜	一夜不落 夢見与
(3)	三二〇	今更 将寐我背子 荒田夜之	全夜毛不落 夢所見欲
(4)	三二三	今更 戀友君一 相目八毛	眠夜乎不落 夢所見欲
(5)	三二三	三吉野之 御金高尓 間無序 雨者落云 不時曽	雪者落云 其雨無間如 彼雪乃 不時如 間無不落
(6)	三四四	和佐毛故我 伊可尓於毛倍可 奴婆多未能 比登欲毛於知受	伊米尓之美由流
(7)	三六三	之賀能安麻能 一日毛於知受 也久之保能 可良佐孤悲乎母	安礼波須流香母
(8)	三七八	於毛比都追 奴礼婆可毛等奈 奴婆多麻能 比等欲毛意知受	伊米尓之見由流
(9)	三七六	牟可比為豆 一日毛於知受 見之可母 伊等波奴伊毛乎	都香和多流麻豆
(10)	三九七	相良乃波 妹毛吾毛 許己呂波於夜自 多貝敝礼登 伊夜奈都可之久	波思家夜之 登許波都 波奈尓
		阿之比奇能 夜麻古要奴由夜	安我於久豆麻 大王能 美許登加之古美
		別来之 曽乃日乃伎波美 荒礒能 登之由吉敝利	安麻射加流 比奈乎左米尓等
		宇治 相見弥婆 伊多母須敝久奈美 之伎多倍能	布麻泥尓 布佐礼登
		蘇泥可敝之 宿夜於知受 伊米尓波見礼登	都追
		宇都追尓之 多太尓安良祢婆 孤悲之家口……(略)……	都追尓之
(11)	三五	三吉野之 耳我山尓 時無曽 雪者落留	間無曽
		雨者零計類 其雨乃 間無 如彼	如彼
		念乍叙来し 其山道乎	限毛不落
(12)	三六	三吉野之 耳我山尓 時自久曽 雪者落等言ふ	無間曽
		雨者零落等言 其雪乃 不時如 其雨 無間如	隠毛不堕
		思乍叙来し 其山道乎	
(13)	九七	天皇の 御命畏美 柔備尓之 家乎撑 隠國乃 泊瀬乃山尓	
		鉄浮而 吾行河乃 河隈之 八十阿不落 万段 顧為つ	
		玉桙乃 道行晩し 青丹吉 楢乃京師乃 佐保川尓	
		我宿有る 衣乃上ゆ 朝月夜 清尓見者 梅乃穂尓 伊去至而	
		碧床等 川之氷凝 冷夜乎 曽許と無久 通乍 夜之霜落	
		千代三手尓 座多公与 吾毛通武 作家尓	
(14)	五四	吾背子之 蓋世流衣之 針目不落 入尓家良し 我情副	
(15)	三七七	三川之 淵瀬物不落 左提刺尓 衣手潮 干兒波無尓	

	ら	ず
(1)	三六六	今日可聞 明日香河乃 夕不離 川津鳴瀬之 清有良武
(2)	三三一	春日乎 春日山乃 高座之 御笠乃山尓
		雲居多奈引 容鳥能 間無敷鳴 雲居奈須 心射左欲比
		其鳥乃 片恋耳一 書毛者毛 日之盈 夜者者毛 夜之盈
		立而居而 念曽吾為流 不相兄故荷
(3)	四三	角障経、 石村之道乎 朝不離 将帰人乃 念乍
		通一計萬口波 霍公鳥 鳴五月者 月者 蒲生
		貫交云へ 戀尓将為登 九月能 四貫礼能時者 黄葉乎 玉貫
		折捕頭跡 延葛乃……(略)……
(4)	八七九	余呂豆奈尓 伊麻志多麻比提 阿米能志多 麻乎寸志多麻波祢
		美加度佐良受弖
(5)	一〇七四	鹿脊之山 樹立奈繁二 朝不去 寸鳴響為 隠之音
(6)	三四三	三空往く 月讃壮士と 夕不去 目庭には雖見 因縁毛無
(7)	三〇三六	白雲 五百遍隠 雖遠 夜不去将見 妹 当者
(8)	三〇九八	奥山尓 住云鹿之 朝夜不去 妻間茅子乃 散久惜愛
(9)	三三一	喜不去 河鹿鳴成 三和河之 清瀬音乎 聞師吉毛
(10)	四〇三	阿佐比左之 曽我比尓見由流
		之良久母能……(略)……弥祢太可美 多尓平布可美等
		多都奇布佐礼婆 久毛為奈須
		由布佐礼登 吉欲伎可敷知尓
		於知多麁都 知和多利
		於毛比須賀久奈美 久毛為奈須
		由久美つ豆乃 須賀乎
		於等母佐伎 己許呂毛毛比
		佐伎礼登
		……(略)……
(11)	四〇六	可伎加蘇布 敷多我美夜麻尓
		毛等母延毛 於夜目得伎波尓
		安佐良受 安比豆許登と騰比 由布佐礼婆 波之弁佐備豆
		伊美豆河波……(略)……
(12)	三五	明日香河乃 川余藤不去 立霧乃 念應し過 孤悲尓不ち有國に
(13)	八七九	多鉄に尓阿波須 阿良久毛於保久 志峰多門乃
		麻久良佐良受提 伊米尓之美延牟
(14)	三七三	三吉野乃 石本不遊 鳴川津 諾文鳴来り 河はきやけ浄み
(15)	三〇一	里遠み 眷浦経 真鏡 床重へ不去 夢所見与
(16)	三五四	里遠み 戀わび 和備尓家里 真十鏡 面影不去 夢所見社
(17)	九七四	従し今者 雖し戀妹尓 将し相哉母 床邊不離 夢尓所見乞

	(A)	(B)	(C)	(D)	(E)
	九〇四	三九三	三〇三	三三三	六六六
	明星之 開朝者 敷多倍乃	須麻比等乃	夕去	由布佐礼婆	歌方毛
	登許能邊佐良受	海邊都祢佐良受	床重へ不去	美夜麻乎左良ね	日管毛有鹿
	立礼れ杼毛	夜久し之保能	黄楊枕	尓努の眞母能	吾有ならば者
	居礼れ杼毛	可良吉戀乎母	何然汝の	容是可多要等	地麻に不落
	登と母尓感礼た	安礼波須流香物	主待固	伊比之兒呂婆母	空消生
	夕ゆふつつの星乃				
	明星乃				
	世人之				
	貴ぶたふとき				
	慕ひ				
	七種之				
	贄たからもの				
	毛我波				
	何なにもせむに				
	和我中能				
	産まれ出有				
	白し王之				
	吾子ふるは				
	古日者				
	夕ゆふつつの星乃				

Osaka Shoin Women's University Repository

れずに」と訳しているのは首肯し難い。『萬葉集』（岩波書店「日本古典大系」）にしても、「まくらさらずて」の場合だけ「枕を離れずに毎夜」と訳しているが、他はいずれも「……を離れずに」と訳している。「去らず」の全体を検討して個々を見た場合従うことが出来ない。

次に、「去らず」の⑯番―（二六三四）歌に移る。

⑯里遠　戀和備尓家里　真十鏡　面影不去　夢所見社（二六三四）

この「面影不去」について検討すると、普通「面影去らず」は「幻となって離れず」というのが通説となっている。しかし、「面影」に当たる所は他の用例では「まくら」「とこのへ」「いはもと」等、すべて場所を示している。したがって、「面影」は「目の前」であると解かれた吉永登博士の御説が『青雲』（一九七五年七月号）にある。その御説に従うと「目の前」の場所ということになる。「去らず」の空間語全体から見た場合にも、この「面影」は「目の前」の場所を示すと考えたい。そのように考えてくると、吉永登博士の御説は正しいことになる。すなわち、「去らず」の空間語の上接語は「かはよど」「まくら」「いはもと」「とこのへ」「おもかげ」とすべて場所語に接続している。

次に⑮番―（二五〇一）歌・⑯番―（二六三四）歌を検討する。

⑮里遠　春浦経　真鏡　床重不去　夢所見与（二五〇一）

⑯里遠　戀和備尓家里　真十鏡　面影不去　夢所見社（二六三四）

この「去らず」の二語上接の語彙に「まそかがみ」という語があり、「ゆふ」の語に関連さしてあるように思われる。であるから、⑮番―（二五〇一）歌は「鏡が常に床の辺にある如く、床の辺に夜ごと〳〵に夢に見えてほしい」となり、⑯番―（二六三四）歌は「鏡が常に面影を映すその如く、夜ごと〳〵に夢に見えてほしい」というように考えられる。最後に資料(A)(B)(C)(D)(E)は「去る」「落つ」に同じく打消の助動詞を伴なう関連語として、一応あげておいた。今回は本論で取り上げるべきでない別のグループの用例として論外とした。

〔付記〕
本稿は昭和五十二年十月九日、大阪樟蔭女子大学国語国文学会において口頭発表したものに加筆したものである。発表時から成稿に到るまでに、吉永登先生・原田芳起先生に、（注1）においては特に鈴木一男先生に、それぞれ貴重な御教示を頂いた。末尾ながら、各先生に深甚の謝意を表したい。

（本学講師）